

モイモイのモイ

(一歩一歩のたった一歩)



カンボジアの最高峰、アオラル山

奥さんの任期が終わる直前の2008年2月、僕らはカンボジアの最高峰、アオラル山(1813m)に登った。トレールは山麓の人々の作業道で、迷路のように錯綜としていた。そしてうんざりするようなジャングルに覆われてどこまでも薄暗い。頂上に立っても、胸のすくような周囲の景観もない。ただただ

暗い。なので本当に頂上に立つたのか自信がなくなった。しかし、そこに鎮座していた小さな仏像に奇妙な笑顔が浮かんでいて、心が和んだ。日本の山麓の民家でお茶をご馳走されたときみたいな気分がなく。まあまあ良く来たねえ、って。なのでたぶんここが終了点。虎と象の棲む野生保護区だし、夜は魑魅魍魎の跋扈する音が聞こえる気がして、その日のビバークは怖かった。そして夜明け。ヒマラヤな

らU2(アイルランド出身のロックバンド)だけれど、ここでは、どういう訳かボルガの舟歌、暗過ぎい。

その後、ちゃっかり僕らのデータをパクってツアーを組んだ旅行社が出現した。超有名な登山家が同行したので、最高峰登山が一気にブレイクすると思った人もいたみたいだけれど、ない。若いカンボジア人が大勢我が家に来たとき、誰もがアオラル山に登りたいと言った。一生に一度は富士山へ登りたいと考える日本人みたいに。しかし、カンボジアに登山文化はまだ生まれていない。誰もが手軽に行けるようになるのはまだ何年も先だろ。



早朝ジープでシェムリアブを出た僕らは昼過ぎにアオラル村に着いた。アオラル川を見に行くと体を洗う親子がいた。アオラル山麓を流れるアオラル川は地図で想像していたような大河ではなく、慎ましい小川だった。でもきつと雨季には、ぜんぜん姿を変えるのかもしれない。



アオラル村の主要交通手段は牛車だ。アオラル山から降りて道が少し広くなると牛車が往来している。僅かな料金で乗せてもらえるが、僕はパスした。アプローチに使ったとき、クッションがないので、僕の老化した腰は思わず粉碎しそうになったのだ。

3月、僕は奥さんよりも一足先に日本に戻った。2年のプランクが不安だったが、大手シンクタンクが元受のシステム開発プロジェクトに、SEとして雇われた。その夏、ス

ムロン、チエからのメールで彼らがリーダー不在のまま岩場へ出掛けていることが分かって愕然とした。まだ教えていないことが山ほどある。なんとなくそのうちまた来るって言い残しただけで、僕は彼らの世界から行きずりのように消えたのだ。システムの現場は半年契約だった。メールの表示された端末の前でハンバーガーを頬張りながら不安が募った。そして11月に戻ることになった。雇用主はまるで既定事項の通達のように1年の契約延長を提案してきたが、僕にはべもなく断った。事態はすぐに大問題に発展した。僕はリーダーになったつもりはなかったが、君がいなくなればプロジェクトは崩壊する、無責任にもほどがあると聞いた。僕は黙って頭を下げ、その姿勢を貫いた。これで、このルートからのオツファーはもうないな、と思うと腹がきりきり痛んだけれど。

そして僕は、勇躍、開拓用神器を大きなダツフルバッグに詰めて、懐かしいシェムリアブに単身戻った。(続く)

目指せ、アンコールクライマー誕生!!